

第3節 微小粒子状物質の成分分析

1 調査概要

微小粒子状物質については、第1節3(4)で述べたとおり平成21年(2009年)9月に環境基準が定められ、本市でも平成24年(2012年)2月から質量濃度の測定を開始したところです。微小粒子状物質は発生源から直接排出される一次粒子のみならず、大気中の光化学反応や中和反応等によって生じる二次生成粒子からも構成されており、その発生源や二次生成粒子の生成メカニズムを知る上で、成分分析の実施が必要です。また、成分分析を実施することで、微小粒子状物質の人への健康影響への知見の集積も期待されます。

微小粒子状物質の成分分析は春夏秋冬の4季節において各季2週間程度、イオン成分、無機元素成分及び炭素成分について調査を実施することとなっています。本市では、平成25年度(2013年度)から成分分析を開始しています。(表1-3-1)

令和4年度(2022年度)は、環境総合センターにて調査を行っております。(表1-3-2)(図1-3-1)

表1-3-1 微小粒子状物質の測定地点

年度	測定地点	備考
平成25年度(2013年度)	神水本町測定局	
平成26年度(2014年度)	神水本町測定局・水道町測定局・天明測定局	
平成27年度(2015年度)	神水本町測定局・水道町測定局・天明測定局	測定項目に炭素成分を追加
平成28年度(2016年度)	水道町測定局・城南町測定局	熊本地震の影響により春季調査を中止
平成29年度(2017年度)	環境総合センター	
平成30年度(2018年度)	環境総合センター	
令和元年度(2019年度)	環境総合センター・水道町測定局	水道町測定局は一部測定項目のみ
令和2年度(2020年度)	環境総合センター	春季調査を中止
令和3年度(2021年度)	環境総合センター	
令和4年度(2022年度)	環境総合センター	

表1-3-2 微小粒子状物質の成分分析の調査概要(令和4年度(2022年度))

調査地点	環境総合センター	
調査期間	春季	令和4年(2022年)5月12日～令和4年(2022年)5月26日
	夏季	令和4年(2022年)7月21日～令和4年(2022年)8月4日
	秋季	令和4年(2022年)10月20日～令和4年(2022年)11月3日
	冬季	令和5年(2023年)1月19日～令和5年(2023年)2月2日
試料採取時間	10時から翌日の10時まで(1試料当たり)	
調査項目 (環境総合センター)	イオン成分 (8項目)	硫酸イオン(SO ₄ ²⁻)、硝酸イオン(NO ₃ ⁻)、塩化物イオン(Cl ⁻)、ナトリウムイオン(Na ⁺)、カリウムイオン(K ⁺)、カルシウムイオン(Ca ²⁺)、マグネシウムイオン(Mg ²⁺)、アンモニウムイオン(NH ₄ ⁺)
	無機元素 (31項目)	ナトリウム(Na)、アルミニウム(Al)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、スカンジウム(Sc)、バナジウム(V)、クロム(Cr)、マンガン*(Mn)、鉄(Fe)、コバルト*(Co)、ニッケル(Ni)、銅*(Cu)、亜鉛(Zn)、砒素(As)、セレン*(Se)、モリブデン*(Mo)、アンチモン(Sb)、バリウム*(Ba)、トリウム*(Th)、鉛(Pb)、カドミウム**(Cd)、ベリリウム**(Be)、チタン*(Ti)、ルビジウム*(Rb)、セシウム*(Cs)、ランタン*(La)、セリウム*(Ce)、サマリウム*(Sm)、ハフニウム*(Hf)、タンタル*(Ta)、タングステン*(W)
	炭素成分	OC1、OC2、OC3、OC4、OCpyro、EC1、EC2、EC3
	その他	質量濃度 ※

*: 成分分析ガイドラインの実施推奨項目

** : 成分分析ガイドラインに記載がない項目

※第1節3(4)に示す常時監視の質量濃度とは分析方法が異なる。



図 1-3-1 環境総合センターにおける試料採取の様子

2 調査結果

(1) 質量濃度

微小粒子状物質の質量濃度の季節ごとの平均値は、春季は $11.9 \mu\text{g}/\text{m}^3$ 、夏季は $8.0 \mu\text{g}/\text{m}^3$ 、秋季は $11.9 \mu\text{g}/\text{m}^3$ 、冬季は $10.2 \mu\text{g}/\text{m}^3$ で、年間平均値は $10.5 \mu\text{g}/\text{m}^3$ でした。(表 1-3-3) 例年質量濃度は夏季に低く春季・秋季・冬季は高くなる傾向にあり、令和 4 年度(2022 年度)においても夏季が最も低い値となりました。(図 1-3-2)

また、年間の平均値は過去 5 年を比較すると緩やかに減少傾向にあります。(図 1-3-3)

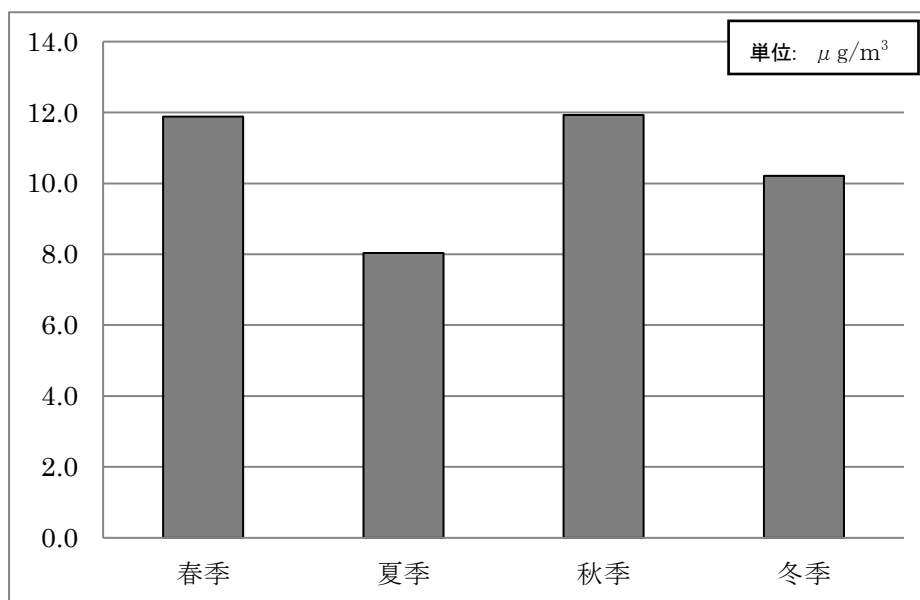


図 1-3-2 各測定局における季節ごとの質量濃度(令和4年度(2022 年度))

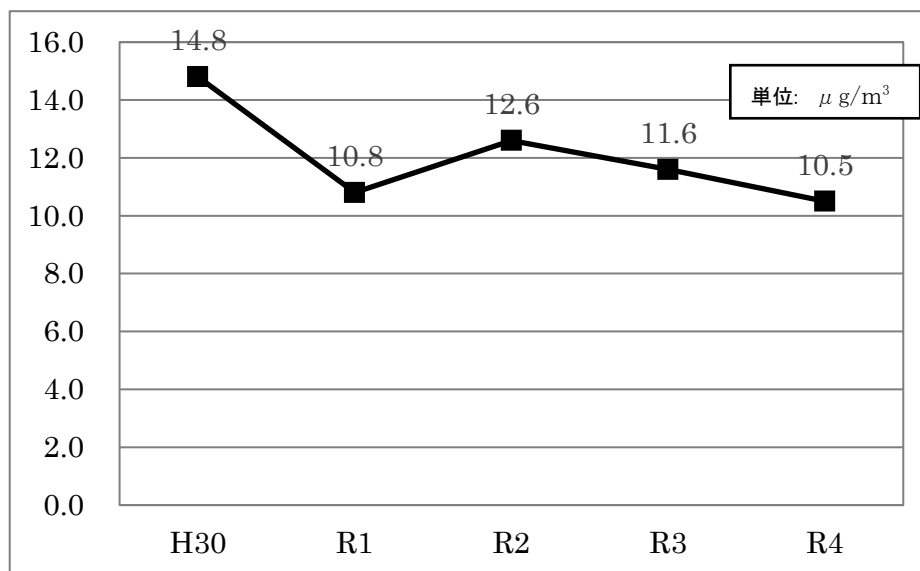


図 1-3-3 各年度の質量濃度年間平均の推移

表 1-3-3 季節ごとの質量濃度測定結果(令和4年度(2022年度))

令和4年度(2022年度) 春季		令和4年度(2022年度) 夏季		令和4年度(2022年度) 秋季		令和4年度(2022年度) 冬季	
調査日	環総セ	調査日	環総セ	調査日	環総セ	調査日	環総セ
5月12日	8.9	7月21日	5.9	10月20日	12.1	1月19日	18.7
5月13日	2.8	7月22日	10.3	10月21日	11.7	1月20日	14.6
5月14日	12.4	7月23日	13.8	10月22日	12.2	1月21日	11.2
5月15日	9.7	7月24日	19.3	10月23日	16.5	1月22日	11.6
5月16日	8.9	7月25日	13.3	10月24日	6.2	1月23日	9.0
5月17日	12.4	7月26日	13.4	10月25日	3.7	1月24日	3.9
5月18日	15.7	7月27日	8.5	10月26日	8.7	1月25日	7.1
5月19日	21.6	7月28日	3.1	10月27日	16.5	1月26日	10.4
5月20日	10.5	7月29日	1.9	10月28日	15.1	1月27日	7.6
5月21日	9.8	7月30日	1.7	10月29日	9.2	1月28日	7.7
5月22日	19.4	7月31日	1.9	10月30日	8.7	1月29日	10.1
5月23日	21.3	8月1日	4.0	10月31日	12.9	1月30日	7.4
5月24日	欠測	8月2日	8.9	11月1日	16.8	1月31日	8.0
5月25日	欠測	8月3日	6.5	11月2日	16.7	2月1日	15.7
5月26日	7.2	平均	8.0	平均	11.9	平均	10.2
5月27日	7.7						
5月28日	10.0						
平均	11.9						

(2) 成分の割合について

微小粒子状物質の季節ごとの成分の割合は年平均でイオン成分(35.5%)、炭素成分(37.2%)、無機成分(3.4%)、その他(23.9%)でした。令和元年度(2019年度)からの各季節の成分の割合を比較すると、概ね例年とほぼ同様の傾向でした。(図 1-3-4) (図 1-3-5)

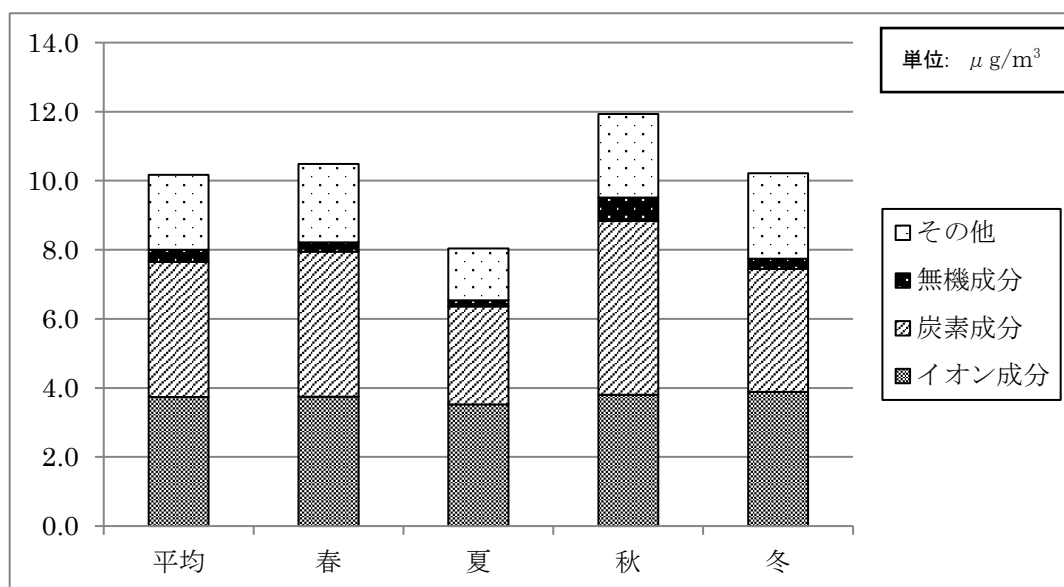


図 1-3-4 各季節と年間平均の微小粒子状物質成分(令和4年度(2022年度))

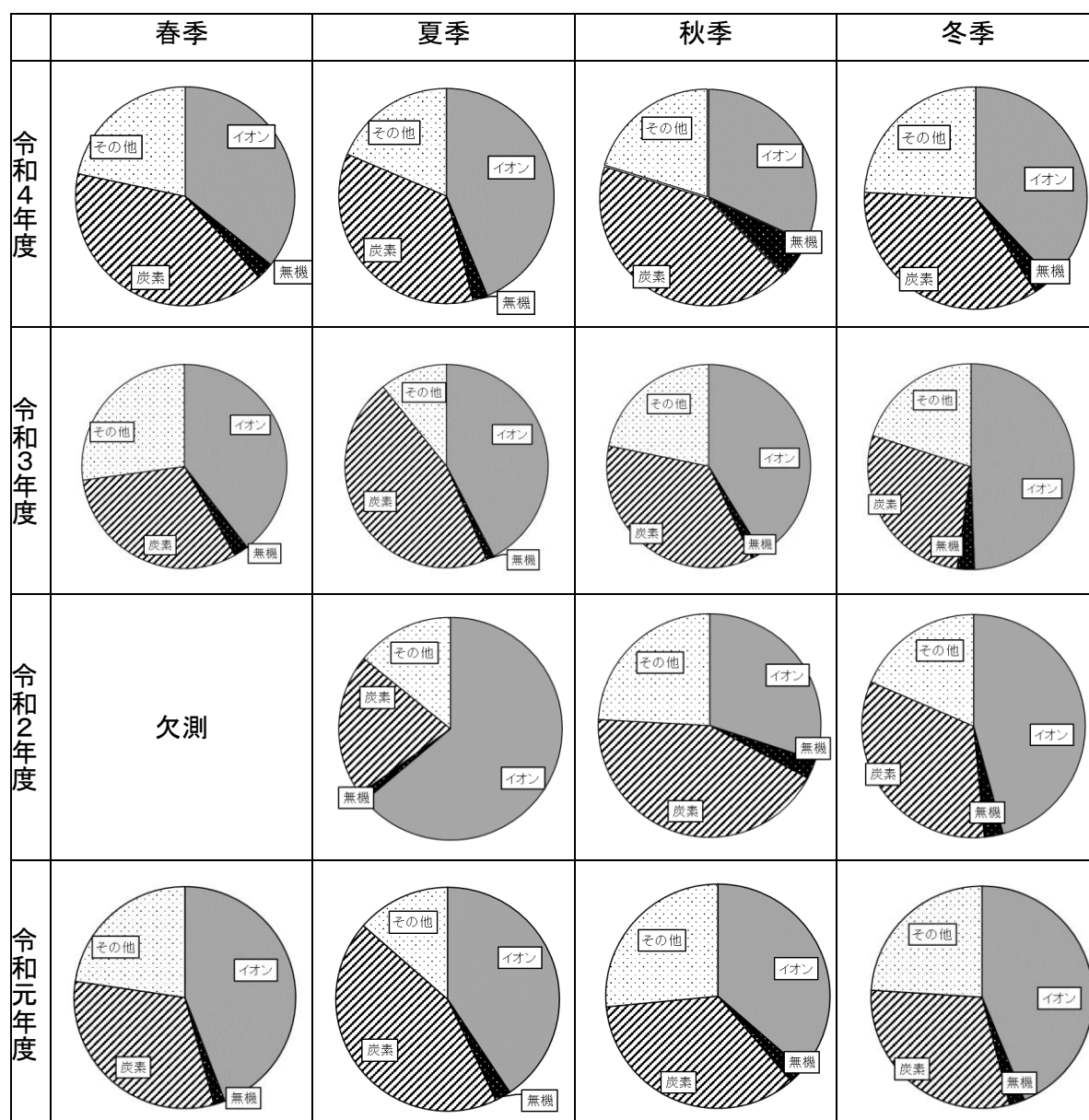


図 1-3-5 各年度における季節ごとの微小粒子状物質成分割合

(3) 主な成分について

微小粒子状物質の主な成分の各測定地点の季節ごとの平均を図 1-3-6 に示します。

年間を通して硫酸イオン、有機性炭素成分が多く、特に硫酸イオンは春季に、有機性炭素成分は秋季に多い結果となりました。

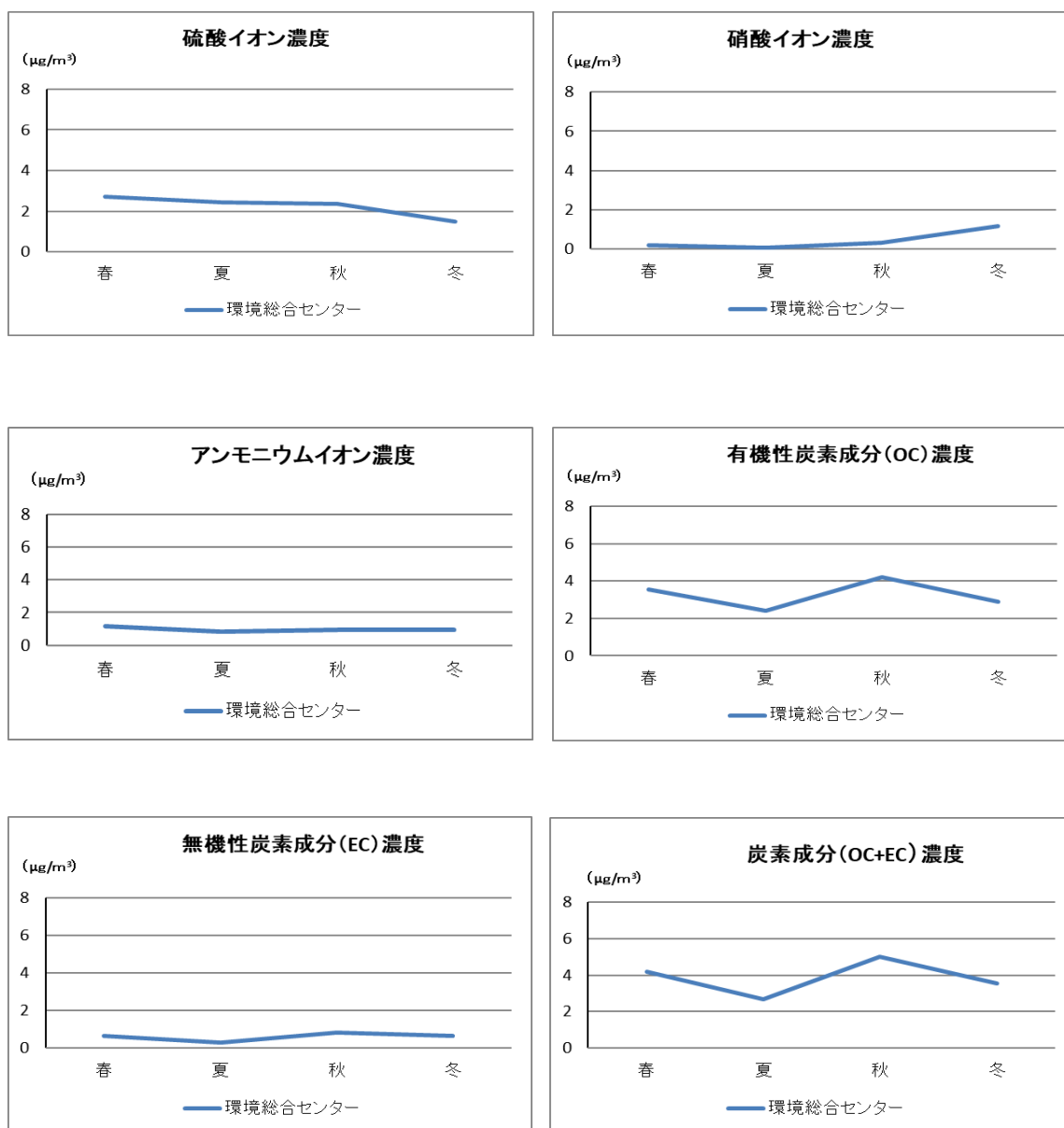


図 1-3-6 季節ごとの微小粒子状物質の主成分(令和4年度(2022年度))

(4) 無機成分について

無機成分は、年平均で質量濃度の 3.4%と割合は小さく、各季節の中では秋季が高い値となりました。

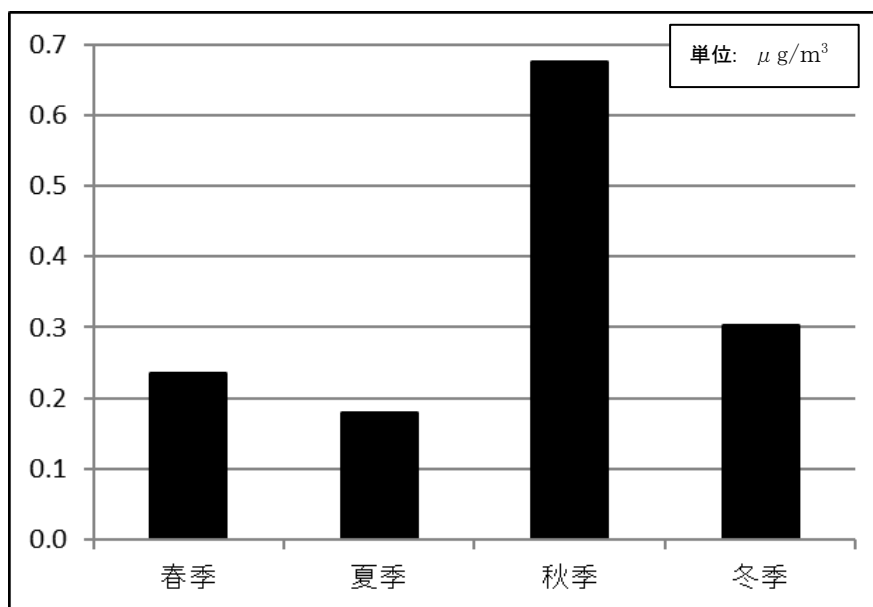
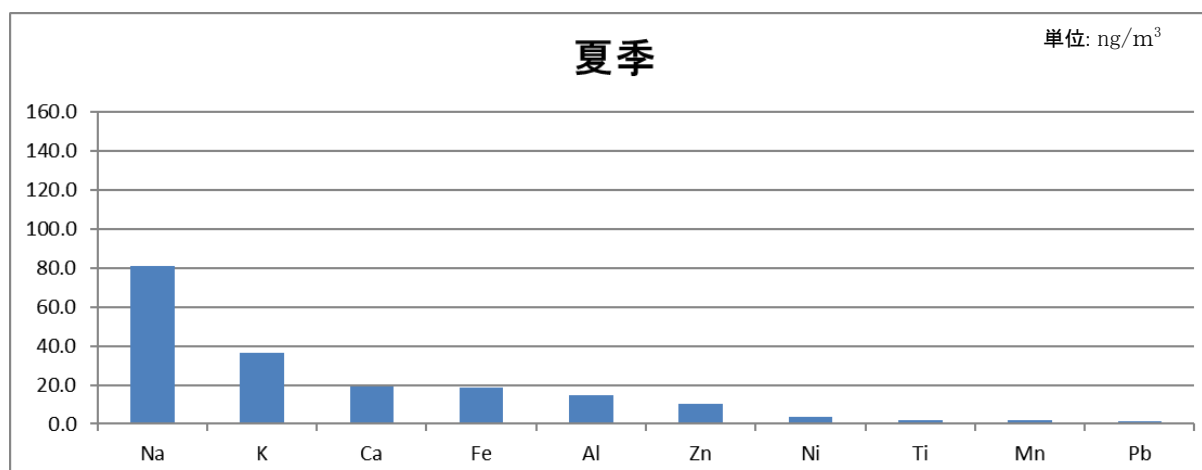
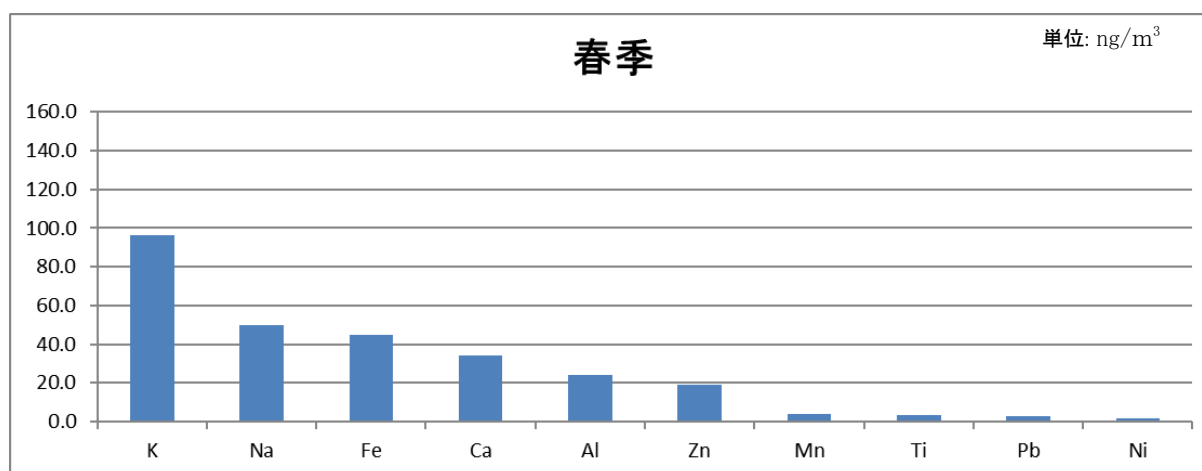


図 1-3-7 各季節の無機成分量(令和 4 年度(2022 年度))



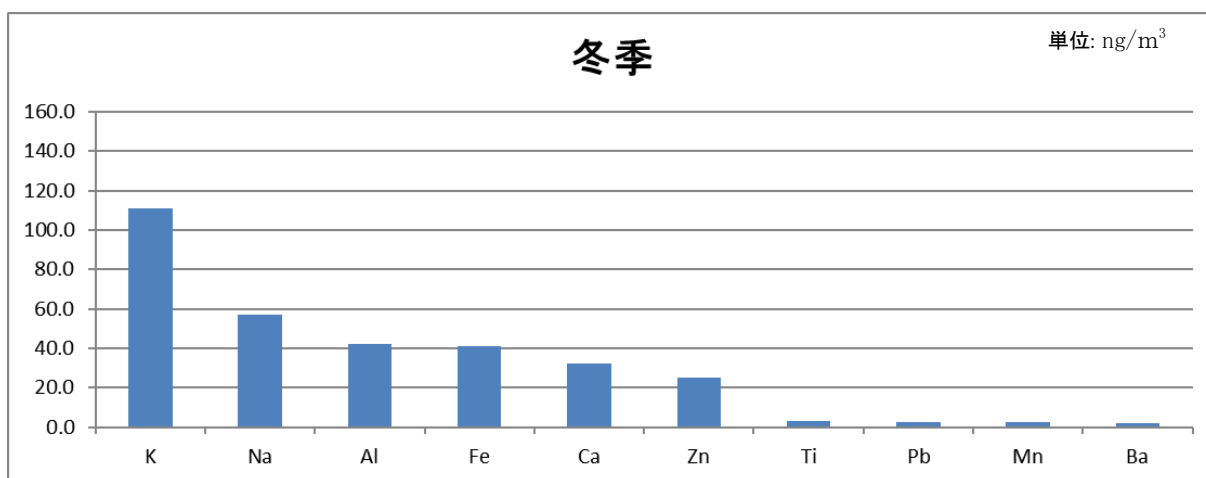
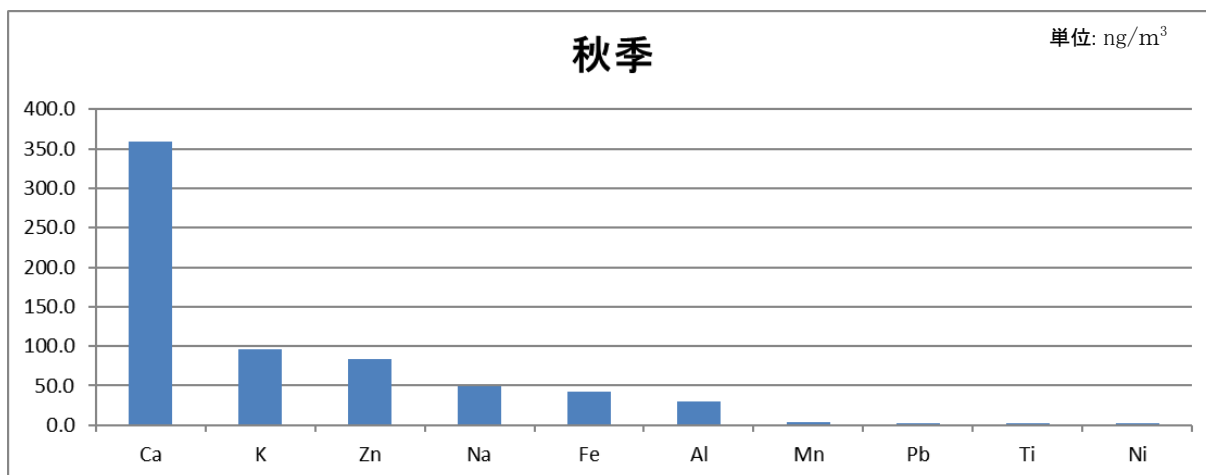


図 1-3-8 各季節の無機成分〈成分量の多い 10 種類〉(令和 4 年度(2022 年度))

3 まとめ

- 質量濃度は、夏季に低く、春季や秋季は高い結果となりました。
 春季平均(11.9 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 (参考:R3 8.8 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R2 未実施、R1 11.1 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、H30 12.1 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 夏季平均(8.0 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 (参考:R3 7.7 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R2 13.1 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R1 5.9 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、H30 13.5 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 秋季平均(11.9 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 (参考:R3 14.3 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R2 12.6 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R1 12.4 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、H30 15.7 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 冬季平均(10.2 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
 (参考:R3 15.7 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R2 12.1 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、R1 14.0 $\mu\text{g}/\text{m}^3$ 、H30 18.0 $\mu\text{g}/\text{m}^3$)
- 年平均の成分の割合は次のとおりでした。
 イオン成分 (35.5%)
 炭素成分 (37.2%)
 無機成分 (3.4%)
 その他 (23.9%)
 秋季に炭素成分の割合が高くなる傾向が見られました。
- 主な成分はイオン成分と炭素成分でした。

イオン成分では硫酸イオン、アンモニウムイオン及び硝酸イオンが多く、2次生成物質の硫酸アンモニウム、硝酸アンモニウムを形成していると考えられます。硫酸アンモニウムと硝酸アンモニウムの和は質量濃度の変動に追随しており微小粒子状物質濃度が高くなる主要原因になります。

炭素成分では有機性炭素成分(OC)が無機性炭素成分(EC)の年平均で 5.5 倍と多い結果でした。

今後も測定を続けていくことで、発生源の原因解明のために更なる知見の集積が期待されます。